知られざる奄美諸島史のダイナミズム - 奄美諸島の考古資料をめぐる新しい解読作業の試み

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>高梨 修</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>法政大学沖縄文化研究所</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>沖縄文化研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2001</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15002/00015879">http://doi.org/10.15002/00015879</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
知られざる奄美諸島史のダイナミズム

一 本稿の課題

奄美諸島の考古資料をめぐる新らしい解読作業の試み

高梨 修

琉球弧地域をめぐる考古学研究において、奄美諸島の考古資料に対して採用されてきた従来の接近方法は、原則として沖縄側、あるいは鹿児島側の研究成果に寄せて理解することから、奄美諸島よりも調査研究体制が充実している沖縄側の蓄積まできた研究成果に学ぶとされる接近方法が、当然の在り方として選択されてきたと考えられる。

183 知られざる奄美諸島史のダイナミズム
そういう方法選択は妥当であると思われるし、支持もできるところであるが、なお奄美諸島の考古資料を注がれた専門家達のまなざしにとっては、ある注意深さを欠いてきた側面があるように思われてならない。すなわち琉球弧の島嶼地域については、北部圏（奄美諸島、沖繩諸島）と南部圏（先島諸島、南西諸島）、中部圏（大隅諸島、泫岳諸島）に、奄美諸島、沖繩諸島、というように、考</p>
資料であるから、十分なる検討が加えられないまま沖縄諸島の考古資料と同様であると認識されている事例が案外多いのではないかと懸念されるのである。結局、従前の接近方法による奄美諸島の考古資料に係わる課題解決に向けて、果たさなければならなかった課題を、さまざまな角度からあらためて冷静に探り出す必要があるように思われる。そうですし、奄美諸島の考古資料をめぐる見方を再考することを進めてみたい。奄美諸島の考古資料を取扱って論じる作業を進めさせていただくことが本稿の直接の課題ではない。具体的には、奄美諸島の考古資料にあらためて向き合うために、従来の研究枠組にとらわれない視点を用意してみたい。そして、そういう視点から奄美諸島史のダイナミズムを少しだけ掘り起こしてみたいと考えている。
二一 評価不定の考古資料

本章で取り上げる奄美諸島の考古資料については、古墳時代から室町時代におよそ並行していると考えられる資料に限定する。帰属時期を限定する意图として、まず当該時期が奄美諸島史における最大の空白時期であり、島嶼変遷を総括する単位としての時代区分が用意されていないという研究事情がある。すなわち奄美諸島において、歴史古学における土器編年作業が弥生時代以後は年代尺度として機能を求めていく実態にある事実、それから考察による位置づけを求めていない事例がたびたび生じており、消極的評価はどうしても避けられないところである。しかし、それゆえ当該時期の考古資料は十分検討されていない傾向も認められるように思わせるので、注意深く点検してみる必要があると考えられる。そして当該時期は琉球王国成立時期に並行していることから、当然、奄美諸島においても政治的社會の発展や形成をめぐる従前の議論は、王権が発生した沖縄本島を中心として展開されてきたため、奄美諸島や先島諸島の考古資料は、そうした議論の基上からほとんど外されてきた。しかし、徳之島伊仙町で発見されたカムイワキ島跡群を
はじめとして、交易拠点を推測させる重要遺跡の発見が相次ぐ奄美諸島の近時の考古学的成果は、政治的変化の社会の発生や形成をめぐる議論の材料としても無視できない。加えて伊波善雄、仲原善明、外間守善等に代表される南島歌謡研究の専門家達が構築してきた歴史的コンテクストに学ぶならば、当該の時期における奄美諸島の考古資料は、やはり注意深く点検してみる必要があると考えられる。さらに、七十ー八世紀段階の島嶼社会については、いわゆる南島関係史料を歴史事実として理解する歴史学側の見解に対して、「日本書紀」や「続日本紀」等の根拠として漁撈資料から資料を歴史事実として理解するという研究者側の見解は、研究分野で著しい相違がある現実を露呈している。どこで文献史料の解釈を強めていく歴史段階の認識について、研究分野で著しい相違がある現実を露呈している。というわけ文献史料側の解釈については、根拠となる考古資料を加えるならば、むしろ根拠となる材料がいられることを意味しているように思われてならない。当該時期の考古資料を考えると、奄美諸島と沖縄諸島をめぐる様相の相違を射程に入れて、十分検討されなければならない。当該時期の考古資料について、古墳時代から室町時代並行期というところに絞り込んでみたい。当該時期の考古資料を取り上げる時期について、古墳時代から室町時代並行期というところに絞り込んでみたい。
（1） ヤコウガイ大量出土遺跡

奄美大島において、ヤコウガイ貝殻を大量出土する遺跡の発見が近年相次いでいる。そうした遺跡の中でも、とりわけ土盛・マツノ遺跡と小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査成果に高い関心が寄せられている。筆者も最近提起している年代理解に従うならば（高梨一九九八・一九九九a・b・二〇〇〇a），両遺跡はおおよそ七〇八世紀に営まれた遺跡であると推定される。

土盛・マツノ遺跡と小湊・フワガネク（外金久）遺跡が、見学した歴史家道の関心を惹起して止まらない理由は、ひとえにヤコウガイ貝殻が大量出土している事実にある。と断言してもよい。すなわちヤコウガイは、本土地域で生息していない貝種であるにもかかわらず、奈良時代（鎌倉時代の螺鈿）における中心的原材料として用いられ、平安時代の貴族達から宝物として大変珍重されてきたと推定される。さらにこの事情から、奄美大島の古代遺跡で発見されたいたおびただしい数のヤコウガイ貝殻が、奈良・平安時代並行期の島嶼社会において、螺鈿原料として対外交易の中での
取引されていたとする仮説は文献史学側では鈴木昇民や大山鶴五郎等が、考古学側では多和田真淳等が早くから提起していたが（鈴木一九八七、大山一九八六、多和田一九六七）、土盛・マツノト遺跡の発掘調査成果を契機としてあらためて問題提起されるところとなる（高梨一九五五、鈴木一九九五）。

そして小渕・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査が実施されて、当該仮説に関わる新しい資料が発見されることとなる。発掘調査成果に基づいて、「ヤコウガイ大量出土遺跡」という新しい遺跡分類概念が設定されて（高梨一九八八、一九九九a・一九九九b）、当該分析結果を主たる根拠として、ヤコウガイ貝殻が対外交易の交換財として琉球弧地域から運び出されていたという仮説が支持見解があらためて打ち出されたのである。

したがって当該問題においては、筆者も琉球弧地域における奈良平安時代並行期の島嶼社会を検討する作業の中で、ふたたびヤコウガイ交易について論じたところである（高梨三〇〇〇〇〇〇、加えて本稿執筆中、偶然にも木下尚子によるヤコウガイ交易の論考が発表されて、網羅的検討による新しい情報や論点が
多数提起されている（木下、○○○）。木下の高説に学びながら拙論を再点検するならば、検討の不
足部分や記述の曖昧部分等もあらためて確認されるところである。いずれにしても、複数の視点から
検討が展開されはじめ、ヤコウガイ大量出土遺跡をめぐる問題は層層然たる輪郭を現してきたと
考えられる。拙論では、①遺跡分布、②帰属年代、③出土貝殻の実態（貝殻集積、貝殻破片集積）、
④ヤコウガイ製貝具、⑤共伴遺物という論点からヤコウガイ大量出土遺跡の検討を進めてきたが、
該論点に従いながらふたたび研究課題を整理してみたい。
まず琉球弧地域におけるヤコウガイ大量出土遺跡の分布であるが（第一表、第二図）、筆者は分布
傾向として、奄美諸島よりも発掘調査実施の絶対数が多い琉球諸島、先島諸島であり認められない
という点を指摘した。島袋美業が、筆者の遺跡分類を参考にしながら琉球弧地域におけるヤコウガイ
大量出土遺跡を上げている（島袋、○○○○）。島袋の集成作業によるならば、開元通宝出土遺跡とヤコウガイ
遺跡の分布傾向が酷似すると指摘しているが（木下、○○○○）。開元通宝出土遺跡を認められないと
考えればは、開元通宝出土遺跡とヤコウガイ大量出土
琉球弧地域から出土す
る開元通宝とヤコウガイの対応関係を想定する木下尚子は、開元通宝出土遺跡の検討が進んでい
るが、ヤコウガイ大量出土遺跡は確認されておらず、筆者には両者に共通する分布傾向が認め
られるとはあまり思えない。当該問題は、ヤコウガイ大量出土遺跡をめぐる認定の差異という根幹部
分で生じているのではないかと考えられる。ヤコウガイ大量出土遺跡の厳密なる定義の再考が必要
に迫られる。
あると考えられる。

続いて、コウガイ大量出土遺跡の帰属年代であるが、コウガイ貝殻の用途の問題に関連して最も肝心なるところである。奄美諸島の在地土器である兼久式土器の編年研究をとくにかく前進させていく必要がある。木下は、琉球弧地域におけるコウガイ消費について通時的分析を実施した。ヤコウガイの消費動向を確認している（木下二〇〇〇年）。ヤコウガイ大量出土遺跡の発掘を確認する作業として重要であるが、こうした通時的分析を進める上でもやはり在地土器の編年研究をとくにかく前進させていく必要がある。

そしてヤコウガイ製錬製作を含めたコウガイ製錬製作の詳細記録と詳細分析を実施していかなければ、根本的問題解決の元等）と全く同様の分析作業が要求されていると筆者は理解している。発掘調査方法と遺跡から出土しているコウガイ製錬については、そうした分析作業を進めており、分析成果の一部が発表されている（古島一九九九）。単純に考えても、旧石器時代遺跡や縄文時代遺跡と同様の発掘調査方法にとどまる発掘調査は、そうした分析作業を進めており、発掘調査方法と遺跡から出土しているコウガイ製錬については、そうした分析作業を進めていたわけなければならないと考えられる。
ものを望みたい。
それによる大量捕獲されている汝ウガイ亀殻をめぐる用途の問題であるが、まず汝ウガイ亀製品解が、木下により提起されている（木下一九九三・○○○○）。小凝・フワガネ（外金久）遺跡に用・ミサ（見崎遺跡等の汝ウガイ大量捕獲一帯の源流）の反転させられる螺鈿技法の開発が始八世紀まではか違らないという事実と一致しないところがあるので、木下が指摘している通り、ただに汝ウガイ大量捕獲の従来において螺鈿の源流を生産する時期と一致して開元通宝出土遺跡が琉球弧地域に集中して認められることから、開元通宝は汝ウガイの対価として使用された可能性があるという。開元通宝が貨幣として用いられてきたと考える高宮観の見解（高宮一九九five・一九九七）を基に構造を立てる考古資料の実態分析が必要である。朝鮮半島東部などの地域で汝ウガイ捕獲が行われる地域に在する汝ウガイ出土遺跡にかける考古資料の実態分析が必要である。
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>例</th>
<th>地方</th>
<th>Allan</th>
<th>F1</th>
<th>55</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2表

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>例</th>
<th>地方</th>
<th>Allan</th>
<th>F1</th>
<th>55</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3表

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>例</th>
<th>地方</th>
<th>Allan</th>
<th>F1</th>
<th>55</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
<tr>
<td>例</td>
<td>項目</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
<td>例</td>
</tr>
</tbody>
</table>
池山洞古墳群の第四号墳から出土しているヤコウガイ製貝鉢の問題もあり、朝鮮半島を含めた交流の様態を十分検討していく必要がある。

易物資という視点からヤコウガイ貝殻を位置づけていく考古学的取り組みも、ようやく開始されたばかりである。文献史料からも熱い注目を集めている研究課題であるが、肝心なヤコウガイ貝殻の実態分析作業がほとんど進められていない。

もちろん重要な研究課題であると思われるが、遺跡という実態の分析作業が先行している。螺鈿原業をめぐる問題は、「螺鈿の問題」を論じた中で進行しているところである。螺鈿原業をめぐる問題は、螺鈿問題の背景である。螺鈿原業をめぐる問題に関しては、一層の議論の深まりを期待したい。

奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島における鉄器使用の開始時期については、考古学的分野の専門家による検討が今日広く支持されている。
当該年代は、考古学側で暫時確認されていた琉球弧地域の政治的・社会の発展における有力指標として、沖縄諸島地域における歴史の一大画期であるという認識が深められてきた。しかし、考古学側の研究成果に依拠しながら、琉球弧地域における国家形成プロセスについて、仲原、高良、新里、谷川等の研究（新里、九七〇、高良、谷川、一九八〇等）が並行して推し進められて、二世紀前後を画期として農耕による民俗史側の研究（谷川、一九九〇等）が並行して推し進められて、二世紀前後を画期として農耕による民俗史側の研究が並行して推し進められてきた。したがって、考古学側の研究を含めて、琉球弧地域における国家形成という社会階層分化をめぐる問題、あるいは政治的・社会の発展と形成をめぐる問題は、国家形成という重大イベントが発生した沖縄本島を中心として常に議論されつつある。しかし、亀久美諸島の鉄器出土遺跡については、白本、亀久美が兼久式土器段階は鉄器時代を突入して
いたという注目すべき見解を提起しており（白木原一九九、当該地域における鉄器使用開始時期の通説である一九二世紀という年代を大幅に遅らし考えられる事例）が増加の一途を辿り続けてはいる。鉄器が相当数出土している事実には注目した。当該事例は、兼久式土器段階で鉄器が普及している様子を示すのが通説である。なお、必ずしも注目されていない分野もある。本美諸島および沖縄諸島で、鉄器が普及する時期は一九二世紀以後であると考

えるのが通説である。それゆえの記述に注意を払う必要がある。兼久式土器と並行段階の沖縄諸島での鉄器が通有に認められる事実について注意を喚起した。考

えた研究において、兼久式土器段階で鉄器が加えて使用されていることから、兼久式土器の様子については、いつかの時代に鉄器が普及していたということが考えられる。本美諸島、冲縄諸島の鉄器出土遺跡については、それらが時期を同じくしている。本美諸島、沖縄諸島の鉄器出土遺跡については、時期を同じくしている。
奄美諸島と沖縄諸島の鉄器出土遺跡を比較してみると、既に報告されている在地土器は、奄美諸島においては、約2500年から7世紀までの鉄器出土遺跡が確認されている。一方、沖縄諸島では、7世紀以降の鉄器出土遺跡が確認されている。特に、奄美諸島においては、6世紀から7世紀の間の出土遺跡が確認されており、この時期に鉄器が普及していることが示されている。

奄美諸島と沖縄諸島の鉄器出土遺跡を比較すると、奄美諸島では、鉄器が普及し、土器の使用が減少傾向にある一方で、沖縄諸島では、鉄器が未普及の状態である。この違いは、奄美諸島が九州近辺の地域に位置し、鉄器が普及する地域と接していることと密接な関係がある。

鉄器の普及が促進された背景として、鉄器の作製技術の伝播や、鉄器の経済的な価値の増大が考えられている。また、奄美諸島においては、鉄器が非常に普及しており、土器の使用が一部で見られている。このように、鉄器の普及は地域の経済的な発展と密接に結びついており、鉄器の普及が地域の歴史や文化を形成する重要な要素であることが示されている。
（3）カメイキ窯跡群

琉球弧地域のトカラ諸島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島において、須恵器と酷似している陶器がいわゆるグスク時代およびグスク時代相当期の遺跡からしばしば発見されている。しかし、当該陶器は、本土地域における須恵器とは器型・形状・装飾等が相違しており、技術的・文化的な伝統性を欠いていることが知られている。カメイキ窯跡群は、徳之島に在住している考古学の専門家である齋藤武治と四本匠により、1981年に発見されている（第一図）。当該陶器は、白木原和美による「類須恵器」という命名が最も広く用いられていると思われる。

知られざる奄美諸島史のダイナミズム
が、遺跡名称から「カムイヤキ」（亀焼）という呼称も最近しばしば用いられている。須恵器が備えている歴史的、文化的性格をふまえて、当該陶器に対して「須恵器」という呼称を断わらずに使用していきたい。

いわゆる須恵器をめぐる研究課題については、カムイヤキ窯跡群の発見以後、基礎研究を展開してきた池田榮史による一連の研究成果が重要である。最近、池田により研究課題の総括が行われており、も「須恵器」という呼称を使用していきたい。

実際の課題がきわめて明快に整理されているので（池田○○○○）、本稿ではそうした池田の研究成果を参考としながら、今後の研究課題を整理してみたい。

「カムイヤキ窯跡群の発見と調査は、琉球列島から出土する須恵器についての問題を一気に対決し、たわけではない」「カムイヤキ窯跡群の発見と調査は、須恵器の編年が確立されている。②類須恵器の編年が確立されている。②類須恵器と類似している高麗産無釉陶器の存在が確認されており、製作技法が検討されている。琉球列島地域から見出された須恵器が出土する事実が確認されている。
研究を前進させるための今後の作業として、第一に生産地遺跡における支群分類、支群構成、各黒の焼成資料等の確認作業である。それに次ぎ、後で池田が指摘する問題は以下の通りであるが、研

第二に消費地遺跡における調査研究が上げられている。池田が池田が指摘している研究課題と課題解決のための研究戦略に疑問を挟む余地はなく、池田は早い時期から類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業は進んでいる着実な取り組みがある。類須恵器の研究には加わりながら、生産地遺跡における実態確認とすることにより、類須恵器類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の発掘調査資料における類須恵器の確認作業は進んでいる着実な取り組みがある。類須恵器の研究には加わりながら、生産地遺跡における実態確認とすることにより、類須恵器類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の確認作業は進んでいる着実な取り組みがある。類須恵器の研究には加わりながら、生産地遺跡における実態確認とすることにより、類須恵器類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の確認作業は進んでいる着実な取り組みがある。類須恵器の研究には加わりながら、生産地遺跡における実態確認とすることにより、類須恵器類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の確認作業は進んでいる着実な取り組みがある。類須恵器の研究には加わりながら、生産地遺跡における実態確認とすることにより、類須恵器類須恵器出土調査の発掘調査資料における類須恵器の確認作業は進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査にも加わりながら、生産地遺跡と消費地遺跡の両方とも類須恵器の確認作業を進め、一方で黒い焼き窯跡群における確認調査에도
や国家形成の問題に対近していくためにも不可欠の作業であると思われる。考古学研究は進めることができない。類須恵器の編年研究が期待される所である。

さらに類須恵器をめぐる社会的経済的側面もきわめて問題となる。すなわち類須恵器は窯業技術による陶器大量生産であり、そうした実実は当然流通体制が用意されている実態を想定しなければならない。また類須恵器の製作技術は移入技術であると理解されているが、技術導入はある集団が明瞭な企図の下で進めたものに違いない。類須恵器の流通における交易機構が問題となるところである。

しかも窯業技術の発達は、鉄生産技術とも強い関連がある。カムイキ窯跡群だけではなく、徳之島の同時期遺跡に対比して十分なる検討作業が必要である。

（4）城郭遺跡

いわゆるグスク（城）と称されるところがトカラ諸島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島に至るまでで、琉球弧域に広い範囲で分布している。グスクをめぐる研究は、グスクという言葉の語源研究からはじまり、グスクと呼ばれている範囲の実態をめぐり、民俗学、建築学、歴史学、考古学等の分野からさまざまな見解が提起されてきた。（1）（3）で述べてきた考古資料に比べると、研究主
不知何故，香宮院島の
大小の店舗や店舗などが
あることになる。

しかし、香宮院島は
様々な種類の店舗が
並ぶことで、それが
特徴でもある。

最後まで、香宮院島
はその-twobase-の
魅力を持つ島で
ある。
をめぐる多様なる実態の把握作業、集落空間構造の解読作業という接近方法に依拠しながら研究を進めてきた仲松弥秀が、新しく台頭した仲松弥秀な発掘調査を武器とする考古学側のグスク研究に対して、設定された城塞遺構と「アジアの居城」という見解主張が広く支持されるようになる。さらに高良倉吉から、グスク論争の争点である性格機能をめぐる見解対立について、時代差的展開の相違を導入した「解釈論壇」の様相が強く、仲松弥秀が問題提起していたグスクをめぐる研究課題と接近方法の練磨をあまり生み出さないまま終息したところに最大課題が残されていると考えられる。

沖縄県側で進められてきた当該研究は、琉球王国論に収斂させてきたと評しても過言ではない。そうした沖縄事例での調査に加え、国家が育んだ社会文化の地方展開を知るために技術的資料として、奄美諸島の事例が検討対象として共通認識されるようになるまで、相当の時間の経過が必要とした。
奄美諸島におけるグスク研究の新しい機運をもたらしたのは、「日本城郭大系」の発刊にはじまる。一九八〇年代の全国規模で波及展開した中世城郭研究の新しい研究動向である。全国の都道府県や市町村でつぎつぎ分布調査が着手されて、鹿児島県教育委員会も当該調査の対象として含められており、当該調査に参加した地域在住の専門家達による事例報告等が一九八〇年代後半につぎつぎ発表されて、ようやく奄美諸島におけるグスクの輪郭が浮び上がりはじめてきた。

一九八〇年代における塩瀬の調査報告書が発表されると、奄美諸島の調査研究成果の蓄積は、沖縄県立博物館が一九八五年に開催した特別展「グスク−グスクが語る古代琉球の歴史とロマン」を契機として、沖縄側でも広く認識されるところとなった。とりわけ沖縄県立博物館の特別展を担当した名嘉正八郎と知念勇が、奄美大島の事例調査をふまえて沖縄本島でも石垣構築されない中世城郭類似のグスクが存在している実態を確認したことから（名嘉・知念一九八〇、奄美諸島の事例に対する興味関心も俄然高揚してきたわけである。

一九九〇年代は、竈利町教育委員会による一連の発掘調査が実施されたり、琉球大学考古学研究室および名瀬市教育委員会による詳細分布調査が実施されたりして、奄美大島における実態確認作業が展開しはじめしてきたと言える。以上、研究動向の概要を述べてきたが、奄美諸島のグスクについて、筆者を含めて専門家達に共有され、知られざる奄美諸島史のダイナミズム
研究は、分布・構造、年代、機能等における基礎研究が著しく不足している実態にあると言えるであろう。詳細分部調査が実施されないまま当時事例と指摘されるいくつかの事例が独自歩きしている。今よりも構築年代が古いとする解釈そのまま先行している状況にある。例えば、奄美諸島のグスクは数例しか発掘調査されていない段階であり、構築使用年代をめぐる根拠が決して十分であるとはいえない。また形態構造においても、奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。グスク研究の掲り所となる基礎資料が全然作成されていないという指摘もたびたび繰り返されてきたが、測量図（実測図）等の基礎資料が奄美諸島では、分布・構造、年代、機能等における基礎資料が欠けている実状の中では、そうした比較検討も十分展開できるとは考えられない。
の詳細・分布調査をもとに近い正式報告される予定であるが，
詳細については報告書に掲げられたい。詳細

分布調査を進めていく中でたらされた多数の遺跡発見という成果は，新しい研究課題の発見作業で
もあり調査方法を再検討していった。しかし，そうした試行錯誤の経過を辿る作業の中から，今後の
論点も確認できると思われるので，調査概要を若干述べておきたい。

①予想していた以上の多数の遺跡が山中に構築されていた点，
②そうした遺跡のほとんどがグスク名称を伴わない点，
③遺跡の最終確認については，山地を走る自然歩きを実施するという方法がないからである。そのため，集落所
在地域の周辺山地に対しては，徹底した視察を実施するという調査方法が最終的に選択されること
にとどまる。それから従来グスクと呼称されてい
る遺跡の名称を，そのままに用い，つま
り考古学の専門家が遺跡の類型概念として用いている
グスク名称を呼称している実事が確認されたのである。当該実事は，実態をきわめて解り
いく研究上の問題であると考えられる。確認遺跡にグスク名称を付して，グスク名称と
単純に命名している遺跡名称の決定方法は，今後再検討が必要であると思われる。そして同一集落
から複数の遺跡が発見されているので，遺跡がある集落名称（大字）を冠して○○○○グスクと

208
命名する遺跡名称の決定方法も再検討が必要である。つまり、遺跡が存在している箇所の小字地名を十分確認して、遺跡名称としていく方法が最善であると考えられる。名瀬市内から発見されている四五十箇所の遺跡の中で、あくまで名称を明らかにすることを選定作業は、名瀬市内から発見されている四五十箇所の遺跡中で、あくまで名称を明らかにすることが選定作業である。あくまで名称を明らかにすることが選定作業である。
発見されている。名嘉・知念・一九八五年。常嘉館・が実態確認を進めている。（常嘉・一九九五年。今後、奄美諸島の事例や中世城郭と比較検討してい

作業が不可欠であると考えられる。

それから発見遺跡をめぐる構築使用年代について、発掘調査を実施していない段階であるから、発生段階の初期グスクである、一二世紀前半に、三三世紀前半という年代を想定している（名嘉・知念・一九八五年、名嘉・一九九三、一九九四、一九九六、知念・一九九六）。一方、三木靖は、琉球王国が奄美諸島に対して実施した軍勢派遣遺跡形成の主たる動機と考えており、『朝鮮王朝実録』『中山世鑑等の文献史料に記載されている四五〇年、一四六六年、一五五七年、一五七年等の軍勢派遣

記録から、名瀬市内で発見されている遺跡を含めた奄美諸島の中世城郭について、一五〇一年、一六世紀に位置づけられると考えられるが、依然として解らない点ばかりである。今後の発掘調査による確認作業が期待されるところである。

四、一六世紀頃に位置づけられると考察されるが、とりわけグスク名称を有していない事実を考慮するならば、従来通りグスクとして類型化してしまった遺跡分類の適用は踏襲するところが大きい。グスクという用語から想起される先入観
発見遺跡の実態を逆に暖昧にしてしまうとも思われる。グスク名称を付してしまうと取扱いが難しくなるため、多見したり、城郭遺跡」、「城郭遺跡」という仮称で呼称しておきたい。

三、奄美諸島史を発見する視点

前章で取り上げてきた奄美諸島の考古資料は、琉球弧地域の歴史を解明していく上で重要である。奄美諸島と沖縄諸島の事例を比較検討していく作業が必要である。奄美諸島や先島諸島における発掘調査成果が、奄美諸島の事例とは比べものにならないくらいの蓄積があるにもかかわらず、前章で取り上げた奄美諸島の考古資料が沖縄諸島であまり認められないという資料分布上在り方である。当該事実の中に、奄美諸島が備えている歴史的意味を発見できないのでない。

そうした見通しについては、琉球弧地域における奈良・平安時代並行期の島嶼社会を検討する作業の中で、ヤコウガイ交渉という新しい材料を用いながら奄美諸島の歴史的意味を考える若千の作業を試みたところである。（高梨二〇〇〇）。

当該作業における筆者の企図は、琉球弧地域をめぐる文献史を、
社会環境をめぐる視点から

（1）社会環境をめぐる観点から

東北地方、北海道地方において進んでいても、深く考えていく上で有効である。筆者は、変遷の過程を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念、「高島・低島」という概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解く概念から、「国家境界領域」という社会環境を読み解る概念から、
当該問題については、すでに戦前において角田文経により論じられた日本文化領域の南限確定の業績がある（角田一九三七）。

考古資料を検討しながら、古代国家が奈良時代に実施した南島政策の結果、トカラ諸島を国家領域にとらえ、奄美諸島を文化領域に加えることができたとしている。国家領域ではないが文化領域であるという認識は、今日の国家境界領域研究に通じる新しい問題認識を含んでいると考えられる。

しかし、角田の研究以後、同様の視点から琉球弧域の歴史へ接近が試みられた研究事例はほとんどない。伊波賢徳により構想、展開されてきた琉球弧域の言語、文学、歴史、民俗等をめぐる総合的研究所、すなわちいわゆる沖縄学が「日琉同祖」の証明という研究成果を積み重ねていた趨勢を思量するならば、奈良時代とし、いえ琉球文化地域は日本文化領域ではないと主張した角田の見解は、支持を集めたとは考えにくいと思われる。

南島関係史料をめぐる従前の研究は、遺唐使航路の問題として論じられていた学史上的傾向が指摘されている（山里一九八六）。そうした研究動向の中で鈴木靖民が提起した研究成果は、古代国家と
日本の列島周縁地域の「化外の民政」として「蝦夷」と「南島」と対置させて捉える視点が貫かれており、
古代国家が蝦夷や蝦夷に対して展開した服属政策の研究成果を参照しながら考察が進められている。
蝦夷は、『日本書紀』と『続日本紀』に記されている南島関係史料の呼称を行い、奈良時代における
鈴木は、『日本書紀』と『続日本紀』に記されている南島関係史料について、和銅年間の多様な幕府設立により多様、夜久まで「化外」としたが以南の
島嶼地域は「化外」として認識されていた実態をあらためて強調した。また1朝貢史料の筆頭に奄美
嶼の木簡出土している等の材料から、南島政策の重要拠点として奄美諸島が中核機能を果たしていた
と指摘している。国家境界領域として機能していた奄美諸島の位置づけをあらためて考えてみると必要
がある。

南島関係史料について最も多数の研究成果を蓄積している山里純一も、奈良時代の南島政策をめぐ
る問題については、大筋で鈴木靖民の見解と一致する見解を述べている（山里、山里一丸九九九
奄美大島の関係について、古代国家が展開した南島政策の要因と比較しながら反乱や征討の記録がほんんど認められない事実
を主たる根拠として、①南島に対する服属政策は早い段階で解される
が、古代国家と南島の関係として位置づけられていたと理解している。「化外」の地域が奄美諸島に至る島嶼地域であり、
奄美大島が拠点機能を果たしていたと考えられている。
水山修一は、国家境界領域をめぐる研究潮流の中で、「同じく境界領域のひとつである南九戸、ならし南島のかかっての地域については、検証されるべき問題が山積している状況」を指摘（永山一九三）、南九州地方、琉球弧地域一帯を南側の国家境界領域として捉えながら、古代を中心とした文献史料、考古資料の研究を進めている。キタイガシマ、イオウガシマをめぐる問題の検討（永山一九三）の下で、「日本策略」にみえる長德二の九七〇年の太宰府管内における観光乱入事件を取り上げ、同事件が奄美島人を追討できる位置にある。②当該事件が発生した一〇世紀末における都人の地理認識として、奄美諸島と奄美島を同じく境界領域にある島として位置づけてよいのではないか。最近、池畑耕一が

特色を指摘している（池畑一九四八）。池畑によるそうした研究成果に加えて考えてもるならば、日本国、奄美諸島の地理

『日本地理』、『新猿楽記』、『日本史』等にみえるキタイガシマの中には、やはり奄美諸島の地理

知られざる奄美諸島史のダイナミズム
中世における国家南総の境界認識

当該問題について触れられている研究は多数に上るとと思われる。筆者の管見がおよんだ研究事例が、前述した永山修一によるキガイガシマ、イオウガシマをめぐる検討（永山一九三）は、中世段階まで論じられている。キガイガシマの用例が、『新猿楽記』、『源平盛衰記』等の文献史料の成立年代に関して、既に検討されており、キガイガシマの「キ」音を表す用字が、二世紀と三世紀の交を境として、以後、『習字鏡』等にみえる文治三（一八七）年の阿多忠景のキガイガシマ逐竜記で、文治四（一八八）年の天野遠景等のキガイガシマ渡海征服記事において、すでに一九世紀末段階でキガイガシマが境外の地域に認識されていっていると解釈する。またキガイガシマの支配体制についてと、二世紀後半の島嶼地域について、後七世紀後半に当たる伊勢国南部郡七島の伊勢国南部におけるキガイガシマの支配体制については、特にもとめて検討を加えられている。永山は、薩摩国河辺郡の薩摩半島南部地域と琉球弧地域を含む島嶼地域から構成されていったとして、二世紀の島嶼地域について、二世紀後半に関しては細部を知らされた伊勢国南部郡七島に知行されていたとする。
そして嘉元四年（三〇六）年の千竜時家処分状や楽治三年三十六四年の島津道鑑譲状等から、一四世紀になると支配地域が奄美諸島まで拡大されている事実を指摘している。当該事実は、琉球弧地域をめぐる従来の歴史理解の転換を必要とするであろう。中世国家の勢力が奄美諸島まで覆いつくした実態において、文献史料の絶対的僅少性から考古学側の検証作業が今後重要となることはまちがいない。

いわゆる『千竜文書』については、中世国家の境界領域研究で膨大なる業績を生み出している村井章介も論じている。村井は、中世国家の境界領域に着目して、未だ未だに神宮官に注目して、境界領域の内政を示し、中世国家をめぐる東西の境界領域に所領を有した得宗被官に注目して、境界領域の内外を示し、中世国家の接点に奄美諸島を位置づけていく研究として、きわめて注目されるものである。

『千竜文書』には、「日五島」と「七嶼」のいわゆる二島に加えて、「満はのしま」「きかいか千竜文書」にある「日五嶋」を中心とした島名比定をめぐり、村井説と永山説に相違が認められる。村井は、当該文書にみられる島嶼が中世国家の境界領域に位置している点に注目して、当該地域を所領とする千竜氏がいかなる支配を展開していたのか考察を加えている。関連史料として、『薩摩旧記紀録』から『藩池文書』を取り上げ、「黒鳴郡司職」「黒鳴郡司職」、「黒鳴郡司職」、「黒鳴郡司職」、「黒鳴郡司職」、という島郡司職の存在から、所領の島嶼に-

217 知られざる奄美諸島史のダイナミズム
『郡司職』を配置して、『年貢』と記されている経済的収益を獲得していた。②島郡司職が確認でき
る、「いわゆる五島に属する黒島と硫黄島だけであるから、所領の島嶼全区域にそうした支配シス
テムが存在していたとみるのは無理がある。」③島の在地勢力との交易による利潤を直接収益とするシ
ステムも考えられる等と指摘している。永山修一も、村井の見解①とおおよそ同様の見解を前述の研
究の中で述べている。

村井は、中世国家南縁の境界領域を支配していた千葉氏に対して、北縁の境界領域を支配していた
安藤氏に配視する。安藤氏の所領相続に関わる『新渡戸文書』の比較検討を行い、『千葉文書』と
著しく類似していると位置づけた。ともに境界領域を所領とする得宗被官、一四世紀に境界領域を
往来する交易活動を展開して、莫大なる利潤を生み出す境界領域の所領は得宗領として国家に編成さ
れ、国家境界は外側へ押しこめられたと考えられている。つまり国家境界とは、交易活動の盛衰に
より伸縮する曖昧で弾力ある領域であるという。

日本における異域認識を探究する材料として、『金沢文庫蔵日本図』を取り上げているが（応地一九六）、中世
利明は、絵地図研究の分野から国家境界領域をめぐる研究を展開している（応地一九六、中世
龍体を境として内側と外側に分離されており、内側が国土に相当する。外側には六個の陸塊が描かれて
いて、いわゆる異域を意味している。注意されるのが当該図の右上隅に描かれている陸塊である。
「龍及国名」、「身人頭鳥」、「雨見鳴」、「私領郡」、という記載があるので、琉球弧地域として描かれていること、特に「異形の人間」である点に注目している。しかも、当該地図で龍の外側に描かれている異域、という多重構造である。総地図と文献史料の検討から指摘されたのである。「雨見鳴、私領郡」という記載も注目してみたい。文献史料から、南九州地方の武家勢力によって、金沢文庫蔵日本図は一九世紀前葉から中葉の成立と考えられているので、永山修一、村井章介が明らかにした事実関係とも整合性が認められると思われる。「雨見鳴、私領郡」とは、奄美諸島が明白におかれた三木靖と石上英一によりあらためて論じられている。三木一九九七、一九九九、石上一九九九。こうした史料は、奄美諸島に対する琉球王府側の認識をよく表しているものであると考える。
田中一平「五世紀中頃以降と考えられる琉球王国の奄美諸島統治」の結論は、五世紀中頃以降と考えられる琉球王国の奄美諸島統治を明らかにすることを目的としている。文中では、奄美諸島に係わる史料の収集が進められており、特に時代遅れの史料を見つけており、奄美諸島の歴史を明らかにしている。

論文の結論部分では、奄美諸島の歴史を踏まえた上で、日本の文化史・中世文化史との関連性を指摘している。また、奄美諸島の位置づけも重要であり、その位置づけを明らかにするために、奄美諸島の歴史を観察する必要があると述べている。

論文の結論部分は、奄美諸島の歴史を踏まえた上で、日本の文化史・中世文化史との関連性を指摘している。また、奄美諸島の位置づけも重要であり、その位置づけを明らかにするために、奄美諸島の歴史を観察する必要があると述べている。
自然環境をめぐる観点から

(2) 自然環境と人間活動の相互関係を考えるという生態学的視点において、最も基本となる概念は環境適応であると考えられる。日本考古学においても、今日、縄文時代の生業研究等で生態学的視点が導入されている研究事例が多数認められる。本土地域と自然環境が著しく相違している琉球弧地域においても、そうした生態学的視点が導入されたと考えられる。そこで本節では、琉球弧地域における人間活動と自然環境の相互関係を近接していく試みが、一層必要であると考えられる。自然地理学、文化地理学の分野で提起されている「高島・低島」という装置について、若干考えてみたい。

知られざる奄美諸島史のダイナミズム
① 目崎英和の研究成果
「高島・低島」という概念をめぐる基礎研究として、目崎英和による琉球弧地域の島嶼地形分
類が重要である。目崎は、島という地理空間が明白な境界により限定できる独立空間であるか
ら、島の自然環境は独立している生態系として把握される。ディランド・エコシステム、自然環境を
構成している諸要素間の相互作用が正確に分析できるという特性を強調する。そうした独立した生態
基礎条件の充実を試みている。島の自然環境として考慮される前提として水環境の二条件を上げ、琉球弧地域の気候
条件はおおよそ等質であると考えられる。目崎は、「高島・低島」という概念をめぐる自然環境の特性として、島の地形を山地、丘陵、台地、低地という単位で細
別して、土地条件の比較検討も行われている（目崎「九七八a」）。

② 土地条件の分析作業が重要であると考えられる（目崎「九七八b」）。
第3図
琉球弧地域における高島・低島の島嶼地形分類

高島 △ 大陸性島
▲ 火山島
低島 ● サンゴ島
〇 大陸性島

223 知られざる奄美諸島史のダイナミズム
が大きく、低島の起伏は小さい。起伏の大小により高島と低島の丘陵に相違が認められる。③台地は高島が砂礫台地であるが、低島はほとんど石灰岩台地である。高島と低島で台地の構成物が全く相違している。④低地は高島では谷底低地が多いが、低島では僅かな海岸低地しかない。高島と低島で地形の発達が相違していることから低地の在り方が異なる。⑤地質は高島が石灰岩で形成されているが、低島は硫黄岩で構成されている。⑥低地は硫黄岩が覆われている。⑦水文環境は高島が河川系であるが、低島が地下川系である。

以上の通り、地形、地質、土壌、水文等の諸点から、硫黄弧地域における島嶼の自然環境は、高島と低島という大別分類が可能である。目早は、こうした土地条件の相違から、高島と低島で耕作面積の比率等に著しい開きがあり、農業等の土地利用形態においても顕然たる差異が認められると指摘している（目早一九七八）。この問題について、重要なる研究成果が提起されているので、次節で触れみたい。

②小林茂の研究成果

高島と低島で対立的構造が認められる自然環境が、地域文化の形成にも深く関与している可能性を目早は予測していたが（目早一九七八）、硫黄弧地域の稲作農耕をめぐる地理学的研究を展開してきた小林茂により、高島と低島で著しく相違している稲作の様相が指摘されてから（小林一九七八四）。
高島と低島という分析枠組の高い有効性が一段と注目されてきたように思われる。

小林は、まず「李朝実録」に記されている先島諸島の農耕関係記事を手がかりとして、稲作の分布状態に着目している。そして「琉球国志編」、「沖縄県図考租税制度」、「沖縄県土地整理記事」等の史料を検討している。その結果、石垣島、沖縄本島、那覇、那覇市とという「低い島」とは、水田が僅少で畑地が卓越している様子が、一五世紀以来一貫して認められる事実を見出したのである。

高い島と低い島で認められるこうした稲作農耕の相違については、小林は高い島と低い島が備えている自然環境、とりわけ水文環境が農耕形態に大きく関与するものである。高い島であることに水田条件が良く、水田稲作が発達している。低い島であることに水田条件が河川系であることから水田条件が良く、水田稲作が普及している。山地地形から稲作農耕が容易でないという事情もあり、森林が十分に残されている。低い島では、水田稲作が普及している。①高い島は、水文環境が自然環境と農耕形態の相互関係について、次のように説明している。②低い島は、全て隆起サンゴ礁の島として分類できるものであり、水文環境が自然環境に特有の地形水系であることから水田条件が悪く、水田稲作が乏しい。なお、小林は、全体規模で展開されていた。そのため耕作開発に伴い森林伐採が著しく進行する事態を招き、燃料の薪をはじめとする木材資源の著しい不足が発生しているのである。木材資源は近距離にある。
第5図 琉球弧地域の主要島嶼における分類地形面積比率
低島は分類されている喜界島、沖永良部島も、高島に匹敵する高さである。高島と低島という島嶼分類は、地形分類に基づいた相対比較分類であるから最高標準で単純に比較することはできないが、高い低島と低い低島という問題も検討が必要であるように思われる。

それからグラフ2であるが、分類地形の面積比率を見るとならば、高島の土地条件が同じでない様子が解る。中でも奄美諸島の徳之島、沖縄諸島の久米島、先島諸島の石垣島、先島諸島の石垣島に占める比率が相当高く、稲作農耕の卓越や森林資源の供給という点で、きわめてすぐれた自然環境を備えている島であり、実在できるからである。ほとんどの地と石灰岩台地で構成されている徳之島は、奄美と沖永良部、与論島と同様の石灰岩台地の集約的土地利用が早くから展開されてきたが（小林一九八三），一方で森林資源にも恵まれており、環境適応の実態はとりわけ興味深いところである。奄美諸島の伝統的土地利用においては、小林の研究成果に詳しいが（小林一九八二・一九八三）、土地条件というより従来的な視点から環境適応の問題を考察していく近接方法は、今後の考古学研究においても有益であると考えられる。
球弧地域の全域で有効なる分析概念であることが確認できる。生態学的視点から考古学研究を進めていく上でも、高島と低島という分析概念は人間活動の環境適応という問題を読み解く装置として有効であると考えられる。

高島と低島における自然環境条件を比較検討するならば、高島が備えている特徴点の問題も浮び上がってくる。高島における特徴点は、歴史的コンテクストにも置換されるうる問題として重大である。国際境界領域の高島という新なる視点を用いて理解することができると考えられる。国家境界領域の高島という新たな視点を用いて理解することができると考えられる。大島と小島という分析概念は人間活動の環境適応という問題を読み解く装置として有効であると考えられる。

高島を客観的に見ると、社会的コンテクストにおける特徴性は、歴史的コンテクストにも置換されるうる問題として重大である。国際境界領域の高島という新なる視点を用いて理解することができると考えられる。国家境界領域の高島という新たな視点を用いて理解することができると考えられる。大島と小島という分析概念は人間活動の環境適応という問題を読み解く装置として有効であると考えられる。

以上、コクゴイ大量出土遺跡、鉄器出土遺跡、カムイイキ窯跡群、城郭遺跡等については、地域的差異として単純に説明できない問題を多数抱えていると筆者は考えている。とういう相違部分をきちんと掌握しておきたいという問題意識が、本

四、辺境（マージナル）から境界（フロンティア）へ（結論的覚え書き）
稿執筆の主たる動機でもある。本稿により奄美諸島の考古資料へ少しでも関心が高まることがあれば幸いである。

筆者は、奄美諸島と沖縄諸島の考古資料をめぐる差異の中に、奄美諸島史の知られざる実態を発見する鍵が隠されていると考えている。そうした差異を読み解くための視点として、前章で琉球弧地域の社会環境と自然環境をめぐる分析概念を用意してきた。当該概念を用いながら、知られざる歴史の中に入れる奄美諸島の新たな姿について、若干述べてみたい。

前章へと進めてきた通り、古代から中世という段階において、国家組織体制の整備が列島規制で進められる中、国家領域をめぐる地理認識が形となると考えられる。

中部高原は奄美諸島を国家境界とししながら琉球弧地域の中で伸縮する地域として編入される以前、中世国家領域は奄美諸島までもが押し寄せがあって、国家境界領域の南縁部分は、奄美諸島を国家境界領域として機能していたという事実を確認しておかなければならない。もちろん、本土地域をもぐる交流関係において、奄美諸島は沖縄諸島よりも高い密度を維持している。しかも、古代から中世の本土地域において、ヤコウガイ、赤木、ホラガイ等の南方物産は高い経済価値を有しており、そうした南方物産の供給地域として琉球弧地域が関係していたと考えられている。

（山里一九九九、髙梨○○○○。とりわけヤコウガイ（役）をめぐって高い価値を有しており、螺鉄の原材料）
として大量需要が存在していた期間も考えられる。琉球弧地域は、「王都」、つまり南部の地域である。そこで、南部の地域に対する財産を産する地域としての意味を抱いていた可能性は極めて高い。永山、九九三、と指摘されるように、南部物産という宝物を無尽蔵に生み出す地域として Dex, と認識されており、国家境界領域における奄美諸島が南方物産交易の拠点として関与していた可能性は想像に難くない。

一八四世紀頃、徳之島で行われていた類備器生産の契機も、そうした南方物産交易という文脈の中で理解できるかもしれない。類備器の交換財が何であるのか、興味深いところである。中里、寿克による古代螺鰐の研究成果を参照するならば、中里、九九五、九九二、国内で螺鰐原材となるヤコウガイ貝殻の需要が高まる時期は一八五二世紀であると考えられる。偶然かもしれないが、類備器の生産期間にとも重複しているし、類備器の流通地域が琉球弧地域におおよそ限られている。事実、類備器の交換財がヤコウガイ等の南方物産であると考えられるならば、あるいは説明できるかもしないと考えている。

また、千倱文書においても奄美諸島が所領として譲与される問題についても、村井、村井、永山、九九三、奄美諸島をめぐる交易活動が生み出す経済的役割の譲与として理解できるであろう。大隅諸島から奄美諸島に至る島嶼地域は、一三世紀後半頃には千倱族や馬済族による支配地域に加えられていたので（永山、九九三）、類備器生産とも接点が
生じていたと見なければならない。
そうした中世世界との接点から考えると、城郭遺跡の問題についても、グスクという視点から
琉球弧地域の中で自己完成させていく接点方法だけでは当然偏りがあるわけではない。別角度からも検討が
必要である。すなわち三木端の「一連の研究成果（三木一九九九、一九九九等）」に認められる通り、中
世城郭という視点から接近する方法も十分運用されなければならいない。

奄美諸島が備えていたと考えられる交易拠点機能を考えるならば、高島と低島という島嶼地形分類
の中で高島に認められる拠点性も注目されてくる。例えば、「日本書紀」「続日本紀」の南島関係史
料に記載されている多聞、夜久、奄美、度感、球美、信覚等の島嶼は、通説による比定を採用する限
り、ほとんど高島である事実を指摘できる。また「開元通宝」出土遺跡が発見されている島嶼は、奄
美大島、徳之島、沖縄本島、久米島、石垣島、西表島であり、やはりほとんど高島である事実を確認
できる。こうした一致は単なる偶然とは考えられない。琉球弧地域の周辺海域をめぐる海上交通や交
易活動で、高島が集中利用されている様子をよく表していると考えられる。

国家境界領域に位置づけられる奄美諸島の中でも、奄美大島と徳之島は、国家境界領域の高島とい
う特殊な性格を帯びているところとして理解できる。両島における考古資料について、そうした視
点から検討してみると必要もある。類図儀器生産が徳之島で行われていた事実も、①国家境界領域の高
島として発揮できる交易拠点機能、②農業生産に欠かせない燃料（薪）が十分確保できる高島の自然

知られざる奄美諸島のダイナミズム
環境、集約的土地利用ができる発達した石灰岩台地の存在等、氷で覆われた社会条件と自然条件を考え

とき、必然性ある選択として理解できるのではないか。

美、沖縄諸島の考古資料をめぐる交流の差異とは、そうした国家境界領域をめぐる交流の差異とは、

で理解できる側面があるということを強調しておきたいた。国家周辺地域というところを、静態として

った見方、見方が生まれてくる。辺境、マージナルという見方になるが、動態として捉えるならば、境界、フロン

ティア」という別の姿が見えてくる。琉球王国についても、機能的側面から考えると、交流の様態を見つめる中か

境領域に誕生した巨大交易機構という見方ができそうである。琉球王国をめぐる国家形成の問題や、

時代における沖縄諸島をはじめとする琉球弧地域の交流の実態について、考察の資料は十分なるが、考

存在する複雑な社会が発生していたと考える文献史料側の見解とは、いわゆるグスク時代、後期後半の島嶼社会について、七世紀には社会階層が

る考古学的事実を根拠として、停滞的な漁撈採集経済社会しか想定できないとする考古学側の見解が
対立している。こうした文献史学側と考古学側における見解の対立問題については、琉球弧地域の考古資料も検討しながるため文献史学側の見解を支持した鈴木靖民のきわめて重要なる研究成果がある（鈴木一九八七）。さらに山里純一も、鈴木の見解に大筋で則しながら、七〜八世紀後半の島嶼社会は漁撈採集経済社会であるが社会階層化をとらえられず、まして階級社会への移行など考えられない（山里九九九八）。

近、大平聡が「物質文化の上では社会の階層化をとらえられず、まして階級社会への移行など考えられない」という考古学の常識を突き崩していくことはむずかしいであろう（大平一〇〇〇）。そして、山里の見解における考古学的証拠の不足を指摘している。しかし、奄美諸島と沖縄諸島の考古資料に存在している差異に注目するならば、考古学側における常識的見解がそれほど不適当であるとは言えない。奄美諸島の見解は、琉球弧地域における考古学研究の常識を説明できない（例外）を多数含んである。南鳥島の資料集成作業が遂行されており、考古資料を網羅しながら「おもろさそう」研究を正反してきた視点と方法に学ぶならば、考古資料からも新たな琉球王国論が構築できる可能性が考えられる。
五、結

考古学研究の分野から奄美諸島史の叙述を進める作業は、大多数の部分が新世紀の営みへ委ねられる。

考古学の應用的研究者にとって、奄美諸島は新世紀の歴史を回復させる作業が何より急務である。琉球弧地の相対的比較研究が今後進められなければならない重要課題であると考えられる。

考古学研究の分野から奄美諸島史の叙述を進める作業は、大多数の部分が新世紀の営みへ委ねられる。
古学と紳士された者、発掘調査報告書に依拠した情報処理型の研究スタイルも浸透している。発掘調査報告書はもちろん基礎資料として Pee 理論が比てはもとより、発掘調査依拠情報処理型の研究スタイルも浸透している。

発掘行為に伴う緊急発掘調査は、開発行為に義務づけられる事務処理の一のためである。遺構や遺物を縦列したカテゴロジが著しく進化しており、発掘調査がパンフレット経済崩壊の、一段と進行しているようである。関密なる資料処理の波浪も情報の新たな視点を創り出すことである。発掘調査方法論の実践こそが最も必要とされているはずであるから。本稿では多数の研究成果を取り上げてきた。重要成果を遺漏しているのではないかと心配される。

理論的枠組に依拠して推論をつぎ重ねる作業に陥らないよう自戒していきたい。発掘調査資料を掲示していく作業の中から、理論的枠組へ再び接近していく作業を実行したいと考えている。確かに、本稿は多分の参考資料を多く収録している。寄稿者が示した釜、物部の作成に当たる、鼎丈太郎氏（琉球大学大学院）のご協力をいたしたい。文末であるが、記して御礼申し上げる。
引用文献

- 琉球大学文学部文学部紀要史学・地理学篇 第三巻号
- 〈須恵器出土地名表〉 琉球大学文学部文学部紀要史学・地理学篇 第三巻号
- 〈上野〉 中村浩監修 〈須恵器集成図録〉 第五巻四日市日本編 雄山閣出版
- 石上英一 〈九州〉 九州大学文学院紀要史学・地理学篇 第二巻号
- 応地利明 〈九州〉 九州大学文学院紀要史学・地理学篇 第二巻号
- 萩原敏 〈九州〉 九州大学文学院紀要史学・地理学篇 第二巻号
- 顕美諸島及び南九州の古美術品 顕美諸島及び南九州の古美術品 学付属南日本文化研究所